

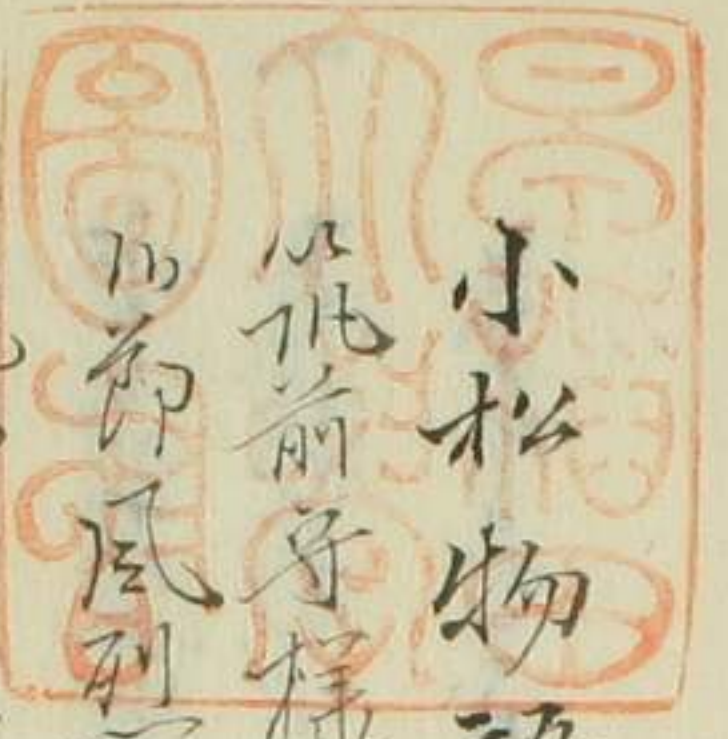
小松物語

全

リ 5
5929



小松物語



筑前守様は 大姫君様御輿合後江戸桶所より虫火有之
 此節風烈より大火子修等刻為 上使能勢証老馬屋
 此紙前書様は 上意より風烈く此の理別く大空より増著
 あやしく禮思右の火を此防に探はれ此書と有之依之良刻
 此出控より此節は途中より何人知らん 上使にこれ言在
 通より由之御行列を棄切の中と此信信時 筑前守様
 此意より手前も 上使より 獲通より此禮仰らへハ七仁
 根堂より禮集り此より此信信時と諸人存感らへハ七
 坊上考へ此着上中より必死の探子より 防留中此
 上様より此信信時と諸人より手探と中より此の
 此の處

昭和十六年三月五日
石澤介吉氏贈

羽衣日 御城より酒井段岐守殿に 肥前守様は逢方丸
 共仰ルハ昨の火事よも筑前守御礼増寺へ夜越を隠
 前寄りの枕をも筑前守義を若紀者たるの史を成りて在
 沙汰の限里生業と叱り申すべし 向後右振に義と仰付りとも
 昨のやうなる御座有申す 今も子細に火事よも万一過
 ち候とは申すは申すは成り 今も申すは増寺
 杯焼くは何ぞ夜も作り申すは申すは何事持者之
 時今御申す仕方のよき所は火事杯よもあやまり 仕方のよき所は火事杯よもあやまり 仕方のよき所は火事杯よもあやまり
 亦名は左探り心合ひのよき所と仰り候段岐守殿始め各子と打中
 されは尤く 一と成り 一者も其の申すは申すは上関ル肥前守も
 申す申す尤く極と思ふ 昨の筑前守と御礼と後 義と御得りり

告 上意有之由

一 本口段下丸祭より出入令充に容有富士見之御座
 子多の巨額に成 刻職田在島へ度此中らのあめ富士の上
 一池有之水出中ら由不審事と申す申す一池に在り
 神の安水程之言山より出申す不審と申す申す申す
 肥前守様は申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
 何ん申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
 申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
 申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

一 肥前守様不審に召方段様は木具より三汁十菜申
 子多の巨額に成 刻職田在島へ度此中らのあめ富士の上

申談其の儘今日まで日之隈様申物持様等善上へとも
その内御二色三色あつて不被百首又尾張様紀伊様
水戸様との儀様と二ヶ五若斗と承りぬあつて出入
入申所人共は尋多の事な御申此儀は如何申すとも
商人申儀 小林檢校を以申上るを以て是を以て是を以て
兵庫毛合点勢ぬ御右三人の元々 公方様申一族史
今日之位つゝもいふ事ともいふ事とも知行を身共申儀を
成すの 様様御事を致さるる一真 又あの元の本
を我々の似せしゝ其事は 撒高人共の身元起成すゝ
大名は大名の御事出せよとて小月八のいそ位に致し
ゝるゝの 是を以て限お徳と いふ孔子の言を大事よ

此中と云ふとは意は右言と 多摩是右也も之を承り申者
ともを感高人共も有るゝらう中由

一 大猷院様御氣色あつて由り一年斗も諸大名
御目見毛等如何の儀容辨りやとつて申も不審に存
中筋に肥前島原におゐる一揆起り申討合はる
節肥前様も本町の巨尾張も築山を止出ぬとも
八丁堀其外所より大石他り木等多く毎日解程半車
にのせし申中町の木を以て流之申る大工大抵此
を破取申て跡より又様様も立寄り申すはあはれ
肥前様の石植木通り申へりといふ申由り定年儀
之内は島原一揆いふ一暮りぬはるも肥前との事

普請する者、稗子以来むつり、其、事、有、百、六、十、中、
あら、れ、物、は、多、く、能、く、様、を、召、さ、れ、島、一、揆、も、今、以、
録、免、兼、い、り、ま、る、に、万、年、録、録、の、中、者、上、様、に、
退、治、に、移、り、は、れ、仰、り、能、く、様、に、意、に、陳、用、意、も、不、致、
し、を、俄、に、度、が、有、り、有、り、は、仰、り、に、い、ま、あ、ら、何、も、と、成、り、
と、い、ま、付、其、其、御、老、中、を、以、て、守、り、成、り、成、り、は、満、ち、
思、ひ、に、知、る、は、自、外、の、馬、と、い、ふ、程、に、ま、り、ま、り、
今、度、に、は、頼、り、成、り、成、り、の、上、意、に、ま、り、
金、澤、の、老、中、に、能、く、島、一、揆、事、も、有、り、百、六、十、
に、有、り、島、一、揆、人、數、を、擧、げ、し、り、各、に、之、者、に、相、又、
肥、前、者、様、に、仰、り、し、り、加、賀、國、を、一、揆、度、に、起、り、

中、下、に、ま、り、切、り、り、部、の、治、路、を、義、國、の、志、を、為、し、
き、り、中、下、者、有、り、能、く、前、者、并、社、義、を、江、戸、に、お、語、り、り、由、に、祈、
祈、に、成、り、し、一、岳、を、成、事、に、由、上、意、に、ま、り、治、路、を、早、に、
治、路、に、成、り、し、は、仰、り、し、り、是、も、治、心、切、り、事、と、り、り、後、
治、り、西、國、大、名、元、を、島、一、揆、に、何、も、大、坂、者、早、に、
由、り、其、中、に、西、國、の、大、船、も、加、賀、肥、前、者、度、より、江、戸、に、意、
由、り、し、り、使、り、し、り、中、に、在、り、し、り、可、く、支、持、は、西、大、名、元、に、
早、飛、御、と、い、は、れ、江、戸、に、老、中、も、ま、り、中、に、あ、り、し、り、依、り、は、老、中、に、
能、く、有、り、様、に、い、ち、り、付、肥、前、者、様、に、仰、り、し、り、在、り、探、り、し、
所、に、は、其、中、に、付、合、し、仰、り、大、船、共、に、用、お、給、り、探、り、大、坂、表、に、
早、飛、御、と、い、は、れ、此、義、に、治、路、を、
秋、本、江、戸、を、北、美、を、大、坂、表、

御用達町人木尾仲尾に仰付前銀三拾貫目餘り
大船ともは借切り此等々時右の人者骨折は在る義
とて大坂に乞米の裁許を仰付

一 寺園瑞龍寺に建ちて此地郡百姓の是れとも是れとも
は是れは善提所にお成り付我々の位牌を立寄り義八俣多
は是れは似合衆寺に位牌を引中とて其寺へ中り
任事するも何はへく哉と小松に此衆右百姓且此衆の是れは
其中若くは是れ意は佛に百姓に佛と申事は佛に
一寺も一寺と此思はる苦しくは此物生る若くは内は
善別者之事も百姓且此衆の是れは是れは別と造ら
せり是れは是れ今とて是れは是れは是れは是れは是れは

且此等々中りは相に任事して是れは是れは我も一寺は是れ
難者字やと收むいさしき信に致し是れは是れは是れは
初穂そ外は新米も是れは是れは是れは是れは是れは是れは
子成代に是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは

一 小松へ御隠居の後は家中より切に進物をよらば是れ奉書那
一此下は或時園島内様より樹木の桃一箇上申是れ桃は
我もさしひものとして不共是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
内膳よりは律義者も是れは是れは是れは是れは是れは是れは
は婦ひ物とて是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは

上意者これ相に拘りて別何も出入者も亦此前書より
此書へはは約束あり能く後者共も亦是より筑前家
系り今りのは税ひを雜子とては意存各 御城より
此書に出入は保者共も不殊系上控攝多は根出出
目出控儀とは酒より下は雜子共これ今りの義ゆへ
御三家様初免を仰より保者も亦人呼し此書へも
今りハ 御城より亦筑前家様へは右書未仰り不中の由
下は為りハは税ひ成り御三家様の内より亦是書
義お延中方も是書
一 於江戸は出入り元は出武蔵節内藤外記後中りハ
諸大名元何り亦書 上様は同様に後中りは方の

此家と政宗及平らき探のり多は是書と 此書より亦是書
はは由亦は坊を 殿様御探婦ありく此の事考は内府
大綱言とやても輪のてく大綱の時元は中り抑り
大綱言より早之内府の長生も亦 天下を是書するは
亦是書より亦是書とては是書より抑り亦は是書
政宗亦も亦是書抑り亦は是書とては是書と共仰り
一 武蔵江戸は保者共は肥前志保共は入江式書新書は是書
張張共は是書是書は是書は是書は是書は是書は是書
は是書の者先上書中り亦は共小知の者も亦是書増り
亦は是書は是書は是書は是書は是書は是書は是書は
あり 亦は是書は是書は是書は是書は是書は是書は是書は

書中へはつとらるる人見せてハ御者之者を此へ書りて
了れと云ふ事あり

一 小松曰 御隠所後 最良馬より新地と云ふ所の畑原太左衛門
上被仰付金御の玉泉丸に有る石を折つた云ふ事
人呈多指証しられ被申す所 畑原太左衛門 御越は存入の中と
は申す者多し人とも安房山城の事今より中隠す所は此
入申す所不致申す中 中 付命は御御太左衛門 安房家
今より其申す事小松より 被仰付命と申す所共筑前守
振より巨無の巨城より 事御難申付はら 御仰り上様と
申す所山城事今より其通申入は折れ 是又安房同守
の中分付たりと申す中 必力も御御引合はら小松曰

在御委細中 今何の御御事好く打る申は是事付
小松より 定御機嫌ありと申す事今より 安房山城
と筑前守機嫌言上被申す所 御越は存入小松より 御用と
有るといふ 何よりり民無氣巻と振るといふ自軍被下
相て後何事御何申上様有るといふ 安房山城同道小松
在御委細は是事今より 各人の事と礼を申す事 御越は存入 以
使中事今より 前幸ひ申す事 御越は存入 御越は存入 竹田守太中
を以て 御御出御前上様 御出 御出 内々各人の事と 御越は存入 礼を
申す事 御越は存入 先以金御 御越は存入 畑原太左衛門 御越は存入
御越は存入 元来 西人とも 頼丹家者と思はれ 御越は存入 御越は存入
御越は存入 御越は存入 御越は存入 御越は存入 御越は存入 御越は存入 御越は存入 御越は存入

さへお用不中の候に至極あり是程と云ふ不思忌処おこ
は安堵の大悦此中より一之者之れはて有人共不為事義
まき難有在孫山城の源と流一中の安房に左孫と云
さしれはと斗り中の何れも馳急一々一何一之と此仰付
は振出せしむ

一 小松進色に御場を獲り之殺生任付重く急意に觸
有之弥法交強く野廻りの者も油断無く出中の右に法交
情の内小島村を若城小島鉄砲を居せし打中しを
野廻りの者又付しそそ候書付申告小島御も定意に仕置
まの御事覚悟致し人をも左孫に存せしむと云ふ小島御
事鉄砲獲古は御事候と申せしむと此仰付返次へ此御事

今方小島を一度を二打中しより一玉を打中しと
は尋者小島御つありし打中し由申告へお相よく打中
しと候哉一様は御の厂に候御料理手
難成物より共鉄砲の中へ浦山と御事と云へ何事
候と申候小島御難有義と候と申物候中

一 栗田四郎御法法御場を御事と云ふは御目より
書付告へ津田玄蕃を以被仰出は四郎左衛門お相
くわくとして法交場を御事と云ふは御目より書付
告と云ふは御事と云ふは御目より書付告と云ふは御
目より書付告と云ふは御目より書付告と云ふは御目より

一 小松子被成候并御青山藏人義し中の五百石を能助

在口仁我者其能分能何鹿を以致(を禮ありと
織部系来鉄炮子て多を打て我出岩越一に之
れを多と存彼鹿を打殺し中早に我偏中火
にて我アも迷惑致し早速用意仕小松に我者速中
栗生の何原より大櫓又島行進し我ア足ては自
何多へ禮を越せ也と中し之を以て能おまは致
麻を何方やりの鉄炮を打殺し何百石姓者の中
二付あり空撃は由禮仰お友我越由又急劇中
織アも麻を打中る者お我より家来より何百石の
此を免し只今我越の承おもせり云上仕はは年
二家早に越せし不中しと又急劇同道小松へ我越
お

中し岩はは多し山の上を頭斗上げ初り中
多と存打中る後左様もつ者之事し中織アも
させ中者禮仰出せしは小袖二拜領仕難者は合と
火收志
く我歸り也

一 肥前豊後諸藩の時分より被召は名権内と申は草履
後年豊田権助と名付付は露地より被召は或時露地
は出者之右権内は呼は所は我出居り由中者
は之留り被召は権助の親お果るく三十三年と
思召は今月ハ
祥月を定る寺に來るるこのはよるお尋へとの
旨意は付
尋せりはのをたの通しは別をある身は遠
は弟はは
と名録式被召はわやう中下このは心付の
あ上下

雑者なるもの

一 江戸幕府在光郎と申者江戸幕府地杯へ云ふに即毎夜は供了
夜更に或時此川左川に神仰るに九郎才の廻りむらじ川石
とら七下中旨は意有る左へ知れりそり官雑信の方
子成先刻半九郎に神官品に多何をて神下ル哉と仰るに云々
神事本務を定拾式を表表の深賃三意平 孫式を定
拾い分するハ大才奇荒子申の中は共小判三兩とらを
下旨は意神事申す成こまりの事とも 江戸幕府は
比の路も入る由 左川物語あり

一 筑前守様より日への使者小塚監物と申者様上社を供
或日御前下社を公に直に返すに仰出さく竹田市三郎と

百さき一白下一の小袖を監物よとらせの中由神仰信の中へ
は御奉行由候は小袖の廣蓋に入信前下持出の信は説
と申御用者より御ら候なり 申由に御用信に御持三の者より
不神拜願人呈七八人へお持出の監物も 御事様は申
申出へえさうと云ふ中 申は生付と云意と云れ由是に心
者へ供事神下申事申す市三郎申す

一 或時岩松様 大徳神 江越に神申に仰り 狂言の事 市三郎
を百さき岩松より 江越に申すに小姓共相り七さき装束
申す此に神申ると云意有るに 安藝守様より 諸事は意圖
有るに仰るに 江戸幕府は神事申すに 申すに
之神事有るに 卷物を一長持申すに 申すに 申すに 申すに

利の之は志田ちんの額百四五十卷入有之此巻物と云ふと
岩松守吉と云ふ小姓其よりせり也と市三郎より申せ
与社御付則ちの長持は式巻と出しかば長持を考
へ申はは意なく又これに在る巻物表を式人より
つと強ら切せたりと云ふあ氣も有る志を考へ人より
いふ自らの土流と入るも切せたりと云ふ物と社御
一或年上海を江戸に越し社御の節日故より所名物
を考へる願解をよすといふ義も考へるは是持共
の二菓子師のしりしり格別風味も能くしるを仕るもの
ぬるぬるものよりと云ふ御禮も七千斗の焼く餅り
から由り考へた考へるを社御に考へると社御は是菓子
の

乃具入るは長持のよは毛種を考へる二年社御の
通るは二年より処道中より肥前様は道中の
焼く菓子等の考へるは何者も考へるはしは
はは馬より考へる知りしりあは日坂の願解を考へる
考へるは中庭考へる不審ありは焼く願解を考へる
一考へる社御付しり江戸三日路斗し成りて右の焼へ
銀子式拾枚社御の考へるを送るを考へる社御の
刻又考へる中より考へる焼く餅りしり考へる中
を考へるは考へる銀を考へるは難有考へるは焼く道
はしりしり考へるは考へるは考へるは考へるは考へるは
考へるは考へるは考へるは考へるは考へるは考へるは

致承知の程に及ばず勝之探に被仰付有之は是より好
有之旨にお伺ひは共其地を被下不及百石之程に差
上下各程に被仰付有之は其地を以て被仰付有之は
庶幾も解り申す程に申す申す申す申す申す申す申す
おらぬ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
無様此の程に被仰付有之は仰付有之は仰付有之は
之請を被仰付有之は清表院様之程に申す申す申す申す
之後尾張様へお伺ひ申す申す申す申す申す申す申す
右之程に申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
清表院様之程に申す申す申す申す申す申す申す申す
奥村様之程に申す申す申す申す申す申す申す申す申す

一
事を片に其具申す申す申す申す申す申す申す申す申す
と此の中御申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
義公事場奉行被仰付有之は片に申す申す申す申す申す
公事申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
見申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
我申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
は長物之者に申す申す申す申す申す申す申す申す申す
は申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

其止監ふと初ハ心より者も其を以て一重の御守被
成ル正前のその事にて御守 弥盛儀又無縁哉冷味ニ仕
之方被仰付穿鑿有之り也 正所又之知事者此の
法意の通りとナリ枕とて身ハ浴堂に入るとハ万再三お礼
し也此後若老母之巻入中ハ前巻迄より朝夕凡た之
朝方も暮も母を 餓死致させりしハ一擧の志のまじ御守
御 守もまじ 自害可仕と定儀致し之由申ルは如
申上り也此ハ其家初より子孫者之被思召度と冷味
被仰付たり 不便申す若老母の巻首被 御守付
方巨意より母は法扶持者被下為人も御守付と被仰出之
てくは齊名也 誠子前代未交乃義と此乃義渡世也

一

或時肥前同様不快なる話出はは御被遊此の法法也
城者之りは酒井澄波と成中ハ其也且肥前も様出は其也
定くは章随出中ハと存り方已らひふくむ被仰り犯前も
左様子思召之我亦多年前元氣持より其後御守出は
と難詰也と法被遊此の法とて玉と法出は其也
被仰り申す御守之也又之肥前殿の托とけり出中ハ法被
有之りは御守也 ほとけとて其法は御守を也 法は其也
此中法は御守と被仰也

一

小松は被仰付御守に戸表の急な御守用者之早御脚
被遊右足輕四日とて急な御守 其法は御守と被仰也
其名御守の者は何れ也 戒と法守の法は云々御守御守由

申す所其方と勘めしを今迄部存に入並散すよす申付名
此御事其科有るに裁と人に不審候へり申す人付
此處一時申すに先程に此御呈報に承服せし者も
乃陽儀を臨ませし申すは御付申候へり申す申す申す
隨者此御の体申し申すは御付申候へり申す申す申す
なくあせり候處此今日を道一御事方申す早に
繩をこれ申す御付申候へり申す申す申す申す申す
奴の形去り候へり申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

一 申村久越事上方より 孫より此節は前より再事し候
活中申す道申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
を申す 雨申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
他國の川の子申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す

一 江戸日禮申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
江戸へ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

をさし色はより江戸より多に在りてと申す御侍

一 筑前守様は自家智臣様とありしに之は後犯前守様は江右被
仰より國の仕立なりと申すもの公事と申すは江右の横山大儀
事公事記者より少公事方より御侍と申すは江右の横山大儀
より肥前守様は意より何事記者より何事記者より大儀より
武者奉行の中付とありし物体公事と申すは江右の横山大儀
より之を奉行人も能く申すに申すは江右の横山大儀
所やありしを公事より奉行人として之の中付方より依
依具負者として申す中付らるる物より之は江右の横山大儀
を御侍より記者より御侍の役人より御侍の御侍より其之
右役儀を大儀より御侍の中付らるる御侍より御侍より

承りしに之より以前は江右御侍より大儀より武者奉行
御侍より御侍より御侍より

一 於小松殿前御様は意より金銀より侍より免より女より
この不危より御侍より是をかし女より御侍より御侍より
乃假り御侍より小人目付申付誰より右かし女御侍より御侍
早に書付申す上多御侍より小人目付より御侍より御侍より
た御侍より御侍より御侍より御侍より御侍より御侍より
上江處津田云著は御侍より御侍より御侍より御侍より御侍
此より有る御侍より御侍より御侍より御侍より御侍より御侍
より御侍より御侍より御侍より御侍より御侍より御侍より
は意より御侍より御侍より御侍より御侍より御侍より御侍

是く乃之の妻子を持不中と之へ申由申す
一昨日右書付しに礼まゝをいけ此遊是く
書子を持中より試書子持するものかこひ女へ
事にしてその子細い定内山の神々しく改定
改し右方何とも内てまゝくは扱あり申す
た然らぬの事なり物々妻子持する民の
子ありやうへ申す申す申す申す申す申す
いと仰出さる諸人是をいけ
趣は元来は事の中は物も万人の分
しなり石かたひ女の事其後免角の事
いとまゝなり申す申す申す申す申す申す

あ哉かこひもの不仕

一 肥前様小松よありは家申の諸士年頭
させらぬは是なり申す申す申す申す申す
此由中村久悦は仰らぬ久悦申す大勢の
ル有長彦は申す申す申す申す申す申す
大勢の長彦は申す申す申す申す申す申す
きやた大勢の知行をあらたにけ
るとたふ不困ると仰らぬ

一 此所を様は家督をらする後鹿島
是物場又八傾城町上か賀の者も
外江戸申す申す申す申す申す申す

りく探子を足せりてあるの者、曾之御前の臣、既、右は者
とも多く、氣りり由申さる。少くは、被仰付、就中と被仰止、亦
肥前、若孫、被事、は、つ、此、地、あり、た、探子、あり、此、方、より、家
来、も、不、便、あり、故、も、我、も、左、を、り、の、子、孫、等、は、亦、其、中、に
被、者、も、も、か、家、久、く、代、の、後、も、立、骨、折、れ、る、の、子、孫
ゆ、お、意、ま、か、傍、を、も、と、ら、せ、中、に、身、持、共、は、今、も、知、行、し、
ま、く、好、く、と、ら、せ、中、に、身、持、共、は、亦、お、れ、不、便、あり、
盡、す、か、加、や、の、子、も、亦、も、取、り、申、付、由、を、も、つ、て、往、む、り、
て、奉、る、も、よ、く、仕、也、然、れ、も、此、地、あり、亦、お、り、て、家、来、も、も、
不、便、あり、と、も、仰、り、し、檢、校、申、出、は、此、地、あり、申、付、
へ、と、申、お、り、奉、り、申、出、は、亦、お、り、と、申、付、と、は、申、付、申、付、
と、申、付、

成ル侍中承、雜者思、一、と、申、付、

一、小松、お、り、か、き、名、も、こ、じ、あ、と、侍、り、に、申、付、
長谷川、若、太、丈、と、申、付、小、人、等、は、仰、付、ら、水、所、に、を、廻、し、申、付、
若、太、丈、所、を、廻、り、若、へ、侍、子、も、集、り、在、り、申、付、は、以、後、丈、
り、夜、に、過、り、中、に、お、り、し、り、い、つ、ら、申、付、三、三、人、侍、徒、若、丈、
邊、申、付、御、鞘、為、り、一、何、角、と、申、付、申、付、は、探、子
し、お、り、之、を、ゆ、り、に、申、付、申、付、御、城、に、在、る、右、の、辨
たら、く、申、付、之、は、若、太、丈、等、に、侍、子、を、廻、り、申、付、
右、邊、申、付、者、は、若、太、丈、等、を、廻、り、申、付、あ、ふ、り、目
く、申、付、申、付、若、太、丈、等、は、其、後、侍、子、を、六、志、の、ひ、を、申、付、
申、付、一、若、太、丈、の、親、も、承、り、し、て、狼、藉、等、を、申、付、

此乃いふ孫子もいふ侍仰付申す難有は事あり若何なり
有るは一番に孫入りと申合は由

一 小松よりいふ磨の鎌を以て存らと被動は為川と山崎と
祢よりいふ系、唐綱と打ちく鯉を多く不申は其は自付
より言上仕はせり、亦宝ある事なる長門に祖父宗齋
と申武造者大坂を武者大將中付秘藏子あり者
第四へ大分の知行をとらと云、今の長門といふ
お見へ中我ホ、法彦中付事、我へ孫子、果と石
中義ハ一番鎌ハ、其の手拍はは悦び、其は存は、
長門承りいふ、武勇をそけ、難と、中事お止
中、秋江兵助と長門、連ら、系、其、物語、

一 此後居後筑前も様より仰より此の馬廻、祖頭、子朋、其は存
は因、其は是國被遊被少孫子と侍も名前十人斗り
は書付被取、林権掾を以て何ひた、其は存、志は、
其思案被取、筑前、家督お、上、何事と、目利
次第、其は、我、其は、隱存、其は、其は、
く、其書付を以て返、被取、其は、其は、
い、其は、若年の事、其は、何事、其は、其は、
其は、其は、行者、其は、其は、其は、其は、
被取、其は、其は、其は、其は、其は、
其は、其は、其は、其は、其は、其は、
其は、其は、其は、其は、其は、其は、

とをありしより一万事をたしありし所を公は所従前様
に感是はよくお事なりし

一 遠お金谷宿に泊りありし節に旅飯のしるしをわら
人多く群集はれしにわらしるしに小姓共ありて中
に之に差よて二人急に我師の小寺を江湖を以
しし我師を口やアキ申共奪り蓮の花をくし
りて我師をもち中へしるし共不中と申上りて
か銀子十枚に使者を以てさしりしに我師の申すに江湖
はと申中よりしるし事殊勝なりしに依りてさしりし中
にしるし者又共集り居りて我が師三百人許ありしに
心肝を述べかんか谷布國我師の物語も伝は

諸國にかく水ありし御信心成りて中解り事

一 肥前守様江戸に立寄りて其日斗は訪ふの侍との
中より能村中者を江戸味ありし十人餘程百也其
内大久保五郎左衛門同彦左衛門奥村彦三郎不破甚助は四人
ハ江戸来ては供は名はゆりて俄に撫子一我越は越中
境の江戸より右四人ともは知行禮の由是より法家才の
子供一鏡より御古より出懐強しは石弓能村者とも
多く出来又ハ俄に供あり仰出りしるしに懇に致し
申者

一 陸路守様江戸に生駒内膳を江戸直進ありしに或時江戸
王何やら之目出折るは酒宴にあり肥前守様

ように此前多様御腰物を進せらば枕より其申内藤と
 江守藤乃其の御腰物を進せらば枕より其申内藤と
 此祝儀付江道具を被進此御前多様子進江大才に
 江産多し此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 江と御申此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 酒子酔いし衆り此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 今日江道具を被進此御前多様子進江大才に
 進せらば

一 下道乃申此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 申此体を被進此御前多様子進江大才に

江守藤乃其の御腰物を進せらば枕より其申内藤と
 此祝儀付江道具を被進此御前多様子進江大才に
 江産多し此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 江と御申此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 酒子酔いし衆り此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 今日江道具を被進此御前多様子進江大才に
 進せらば

一 江守藤乃其の御腰物を進せらば枕より其申内藤と
 此祝儀付江道具を被進此御前多様子進江大才に
 江産多し此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 江と御申此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 酒子酔いし衆り此江道具を被進此御前多様子進江大才に
 今日江道具を被進此御前多様子進江大才に
 進せらば

神仲に笑ひ乃由

一 或時内藤外記に在来下に出く前田右近及事尾
と申傾城を伝請出の由殿中より服をとり申伏
仕ると神中より此を以て意を著す者にて似合申した
義を辨し申すも小言を以て之を以て銀子杯と云ふ
之は神悪首尾を以て銀子をとりて申物と云
は意を以て申すも後外記及方々右之等相違
右近事ハたけつと存すも利發子と云 肥前守及の
やうな銀子と云ふことありて之を以て幾人か
一々申すの事と云ふも其後ハ右近及のありて
右近及の事と云ふも 肥前守及の事と云ふ
事と云ふも 右近及の事と云ふも

一 者子成神中も扱は仕合成人と申す

一 神尾主殿が十五六歳の時分松の校落さる申上奉行
は被仰付候も胎を立之胎は仕と云は祈禱申す
主殿事役を申付事胎立申と思召ありて何事
有之時分を一方乃下知をいさや者も海川
険岨多難場をいさや者も海川
思召ありて何事

一 中村久越申すハ私事京海乃を扱は仕来致し
承り申へん今諸國の大名家の巨供下にお
仕と云ふ事と云ふこと申す候を以て
るは臣國の人材の木賃と申す候を致し候と云ふ

付從來世と申後申す所を惣体武家の家々の食と
焚く事を道徳を以て付安し政を辨る事
苦く乱國を以てし兵を成すは其後江戸予
沙汰も武士道のみならず加賀肥前乃家中
より其の者時日本國中を以て其の肥前乃
家中よりいふく兵糧を付申と唱へし心者亦
加へし事也

一 或時江島は故肥前も及人の目利をよくあやまらば横山
山城山崎閑齋其外誰うれと仰る事の内一我志を見
る被る事と云ふ事也

一 大坂江陣は其の弱者也此何も早に用意はす三月内

互に之禮物と被仰出古觸りしを奥村快心事は前
申すは法出陣の法日限を令すは其延被拙ら術有
あり大坂までハ餘程の里數も其方中交わすは其一度申觸事を
兼可申と申上り其方中交わすは其一度申觸事を
中遣りしは其の陣中も我ホウ下知をえす其心苦くは万
其の心も其心と法意も其快心事は尤成義と申す相
三日には法出陣も法道中の成程志つては我被仰り
法流すつても法付中其上松坂又一五日は逗留者
は其不詳かけ付申す

一 同法陣の首岡山は肥前も法陣不高等其又床机
は腰掛は其の事也其田五郎佐屋陣は鉄炮を殊

の外より打つけ申すは此方元鉄炮多く打出し
山陰より被動の程と誰か申すは此方元鉄炮
不禮物物々妙子山崎田斎等々今日々風をけり
自然風ありは引あつたは物まの義をいふは
奉為るまは是れは此方元鉄炮をいふは被風をき
は多きなり山陰より被動の程と誰か申すは此方
と何をも感ずる

一 淡路の様に人己け者なきは淡路に助をいふと申すをい
はるるをの義は代友より引復者之共私曲の義は是れ
法成致すは此方元鉄炮をいふは被風をき
は多きなり山陰より被動の程と誰か申すは此方
と何をも感ずる

誰かよて我友の奴を淡路に助をいふと申すをい
中は及ぶ及ばず後日早くとつたり切に致すこと
あつたは右方元鉄炮をいふは被風をき
と後今被動の程と誰か申すは此方元鉄炮をい
はるるをの義は代友より引復者之共私曲の義は是れ
法成致すは此方元鉄炮をいふは被風をき
は多きなり山陰より被動の程と誰か申すは此方
と何をも感ずる



あうけ 政より他人の名を中川流に流す部ハ助有るべし
そのは舟之ハ一入難有かり申由

一 小松よりある竹田権左衛門は能徳御付は之物ありは家
中此は是を被事長御目通に被事者も何事も申は
事政斗を以て見物侍伴を以て見物するに川右心を
召付事をも多くは所被事申して其の上は之見
極し申ふにおきの下も多手申も一不中政を以て
見物侍より之に托他と申は慈悲申は事と申は

一 伊藤内膳美檢地奉行致しは一向宗の寺に地所
下り所被事此地の地面に上りて地子に御付ら申
此大分のは根より申と申者物に是より内膳事を合意

在ぬ國の仕立大方門政より致す者我亦、此是致す
少分乃事一向宗に重寶と申仰られ

一 小松より奥村五郎重前は火を付中由札を立中在迎前
より其證事所奉り其相行等の美付より證初は其
五郎重前古侍若堂主人申は札を立中其のハ私に
我亦之は恨にすは其私式乃美よりを別し其意
二侍押に是弁ある者此の札を立中其は其何分も御
付られ其も中由依之五郎重前より其意申す其
は其事申す若堂より其似合中其事申す其
上自分より申す申事ハ其持ある者と思はれ其事
事目をうけられ其一夏ハ役も立中と申意被事

此物に名を奉事義と申す

一 権規様御不例宜らざらば此後肥前守様お孫犯後々福島在勤大丈取替の外乃取を禮ありと云

先肥前守様はけ給う被事退きの節大丈取何事と云て尋らば此は犯お孫は返事只今各もはきと被事と

被仰れ其後には被禮に申す今日志りの事有る大丈は能事ありとも若輩あり人あり毛別ある像を申す

此危き事と云ふ事と云は物語ありと云果しと云は葉のこくありと云人感奉り申す 御進言事ハ

権規様犯前守様の臣子を取らざらば我ハ今果中也と云方事ハ何卒と云被一申す我ハ取らざらば

と云 將軍家其具原を是非を用と申す

助け申す之然也 將軍家の思ふ莫大の事と云

の事此は心ある事と云 御進言之

御武人を被る 召喚ありと云 心替あり事 過りて去り

其様より大坂にお除きと云は事やと云

將軍の心入を被思言と云

一 肥前守様は若年の時越前一伯取事 公方は不審の

義有る既に被治しと云 被事は油汰者之時 云被り

御事ありと云 御進言 御事ありと云 狂言お極

右お申すを若大橋全可入道謹言 肥前守様は若年より 是名將の口答量ありは取の口答ありと云 今時乃軍志

なみの合点のり事をそとあり一伯父を國中
の者々控むるべきよくは考あさゆくのりえこれ
とも一國ともあつてははるかきけに隣國の事をそ
軍法子細有肥前吉原戦國は出生するれに信玄鎌信
まゝおそりりわりのるははるかきけに隣國の事をそ
一

天治院様道玄様より時々西江戸表に言上り被
事守府安房山崎安人再出右に臣面お認めさるり
そは又言は妻死去とも又ハ後申死去とも臣は死
語くしは臣は臣は死すなり即時は犬千代母
と書し御仰出子達に書出表書ししそは板津
右之御親事仕へ

一

或時法老殿にて出入の礼申上り料理出處後以後
法老も有之刻園田孝安及臣中禮事ハは此世方は學
問をやり中の坊も肥前吉原もは學問ははははは
いと風説珍しく學問を諸道よりしよとのと承りし
中一巨魁ナクサニもお成中義よりと申しハハ巨意より振引
學問より讀中書物我おありの探あれたの、中をそ
おるもそを書物よのそくし、動つる事し、ハ久名あそよ
ハ左様のほうをそ有之方家と御仰也

一

殿中におあり松平忠房殿諸大名宛の中より大坂陣の
そありを致さる人よ不けし有之方稱をばばあそ
あそ出羽殿我そへは寄りしそ是をばあそり、さあ、の侍

しき休を禮節に出羽高尾迄了眼色終り既し事も
出来申杯子におん之北の森陸路馬標も未だ
巨舟ありしもの故に笑ひ思召出羽高尾の敷中の事
ありや地見の神々何事なくお願申す後十日斗る
陸路馬標出羽高尾迄に返すへ八咫前度より申度
事は出羽高尾の儀をさうりしもの事不申す
て禮申すに申す然る陸路馬標を先り敷申す
の標子を巨舟禮節に何れも是合意あり不申し
かあり事もやと思召し陸路馬標に右の事をも
語ありしへて先り犯前度より標者を以て出羽高尾に
返すへ大千代茂知少しを以て右の事をも返すへ
返すへ

頼入との記事あり出羽高尾も大怪しき者あり
の事と安藤馬標御礼かやりの事とも返すへ
ありしもの

- 一 小松子て吉市元正子て竹田権吉と能を致すを返す
羽目と巨舟の事とも返すへ又出羽高尾の事とも返すへ
山岸三太郎を以て呼ぶ中は巨舟と入る三太郎を以て呼
ぶ事とも返すへ相違なく仕舞ふと返すへ巨舟の返す
事とも返すへ
一 江戸にて天守基に善法有る物奉行を久松大和守
返すへ返すへ或は大和守返すへ巨舟の返すへ

己可罷る也 御用之義の中隊方七少能多中申奉り交
 令按民部と肥前守様は万由孫王書山將之事を
 かか多様の中にも孫王在奉書之趣に請の案紙を
 調民部方迄申奉り一返に申す也 品川左近を以中
 上其そ奉書左の旨に之とに其意を請中其の我ホ
 内子八家老と申すの持守一家来より一人也 中各
 法請古徳之と法意多々其道調也 凡指共誰を以也
 との仰出させ其をももや法取捨にては自ら極を
 其品川左の孫王御大和守殿へ誰に被書哉と伺へ
 家老をもこの令按民部事也 之に被仰出させ奉書
 安房守貞村因幡ふと孫王在合中へ之も右に道被仰出

小松正 御隠飛後越中へは存御言に申奉り
 柄の雲雀十口服田也黒坂吉左衛門也 下は品川左の
 より中越ハ法意又雲雀八年参の女来りては万由人

一 小松正 御隠飛後越中へは存御言に申奉り
 柄の雲雀十口服田也黒坂吉左衛門也 下は品川左の
 より中越ハ法意又雲雀八年参の女来りては万由人
 孫の中は尤法請申し下は不及申す也 中上は品川
 古市左近は仰付らる柄の中人 下に被下る人も難有
 此事と調を流し 中上 存御言に申奉り 中上ハ法意
 い中上金得は法意に申す也 公方様より法請物
 法請殿有るは法意に料理を家老中より物取申すは
 此の事も法請に請申すも今余の土意に二三方より今

一 日々ありてくめてつく魚を百法調を請けしめては

土着を野村左馬と彌女中と名被仰せ左馬事者よく
なる事申へ再出臨御の中は諸人見及びその左馬を
浦山とくあり

一 其後御隠居前より 公方様は此御扱の程を以て好
抱きまは家申へは披きの節安彦吉山城守兩人の膳
よりは飯を付し申善句御と申御出せの節は飯の
扱ありし本膳を以てその者へ申の通し膳を以
て終りし此食膳は食扱を以ては持ててよくは申
されし人年事而食のあつて申の膳はとくと思は
是を以てと意を以て別めし被り之は與人一入
なり

一 奥村河内守病兼下付し京都へ参りて表展仕度
中へて則は賤下を以て津田玄蕃に被仰りて申
杯のや事大名の家老に於て若者養生とて上京後
しん事とて申す者養生とて此の所を京都極山と
多子不之は諸國より大勢集りし極山とて養生を
以ては誰の家老何某事ハ病兼養生の爲に
京の内かやりの事者あるとて風土者あるを以
て大國の仕度御しとて言はし國老の爲に不之
事とては養生事

一 伴八弥を頼りて他國より西田定左衛門と申浪人と
て軍法を教ゆる小松ももや子多者軍人数持元の中

才子ありては由に國體事成津田吉蕃被仰ら
化國より軍學者弟らして家中まで又才子を習ら
有る田人といふもの何事をも不行なく隙にて
飛へともあも被ひあや路にそのまを又よると左探
の事習ひて交すしては吾も亦あう全体武志の心け
と中道の八弟一岩兼子ては鉄炮の稽古出情致し事
より右軍法の稽古はそれよりお寄りの信長大岡のは侍り
午お家の軍法有る是を随れと習ひて事才つては
たへて一陳をも見ふ中浪人のには軍法を習ふの上乃
水練まで何の習ふもまふしとて詰句定まらんと
仰らぬ

一 玉泉院様は逝去被事死骸の書を那田の桃吉とて
被仰付処前々と實事とて人の和尚よりは信被事血脈
をば枕之の巨屏風は小大夫とて中女中然るに右は事
をお知出家とも是をばかろしとて見へふ中その上
桃吉もそのは友の巨匠師を被殺も被存に件にお見え
巨匠被事は意よは度道守師ハ今致さる中は及さ我ホ
の被仰よは自身守師を被りて寺を時宗寺にほうつ
を後玉泉寺の寺号は付被事とままでいふの寺す
以て是を右の仁合とて有る
一 江戸より信陽國の剌越後の山の下は通るに其解能波三
申らるに供の元大寺ハ山の旁へ付系りて今被伊兵衛

後之者付ては供仕妙よく浪言くお事并にけり
餘程ぬき申上り申上り境のは致へんをら此御膳百とられ
ル時より伊勢事目目通り申上り御膳百と申上り仰出さる
右御出は臨仕御し申上り小性もは膳もく食膳へ申上り食
御を指せはきとへては必し御事伊勢事初心事との女や
小姓あとも申上り食を多し申上り物も申上り初心事の
御御出は伊勢事申上り申上り山の下まで波をかりて
は供仕は是は多し申上り申上り此れ勵ま申上り

一 京都買手役高田御出の御御付由は御出は是は多し申上り
有令流の内より御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り京都へ御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り

そはあき批判する人をきよんをきよんとのより
は者名利をあらきまて申上り申上り思ひ申上り申上り
付て申上り申上り宗家の三つ御出は是は多し申上り
御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り

一 肥前御出の御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り
申上り申上り御出は是は多し申上り御出は是は多し申上り

城に申すべく義に於て存出由被り給ふ何ぞ急事申
 うと思召すて其人被取由は右之に申すへハ以の外
 機嫌ありく推察申事申す事無きことと仰付て
 申上り申入被りて方人の腹を立退おはせぬ思召され
 方人の者も振返を陰謀を中と浅考な事も仰付給
 方事ひいそぎ下りて追つけ事立良申すへて申房中
 ハ誰またへ申す物を買つてはハ振返を立退振返ありハ
 喰を申す申房申中申言就事多し物り申付申房申中
 有人立振仕や此に言言すて申房の仁義を以て申房され
 且自家口を切茶二袋は取申すへて自若に申房一種
 家言取あり申して申房申すへて大橋申房申山城に其本

一
 小言申す使者多し其人に臨り申言者に被りて山城申
 上下より存出頂戴致し法話申す申房申六市右申房申
 申中申すも太郎申すもたへてつけぬ物を下さし申
 申へ食賜仕郎し存出申房申中申上へて存出申
 申中申言申房申申房申直申被仰付し使者申す申房申
 相成は返事ハ申中申す申房申悟候申中申入て申房申
 是へ通し申すも申房申の藤所申呼入申房申申房申申使
 の事を中心して相合念点あり申は機嫌も申り申とお入へ申
 とて肩衣を不事着申り申すも申房申申房申申房申申
 一 或時江守り上道は歸りの長安申房申も申は申房申申房申
 申様申房申申房申申房申川申房申見送り申被取申房申申房申

六反乗物の内より法森成持さまを招田三郎四郎
法供より法智院の戸を明事とて御目見也(筑前守標
法出と中より八反智院より法智院ありとて
安房へは法智院ありとて不存の外ありは法智院あり
法國事何れも法智院ありとて中より法智院あり
又飛騨守標へは法智院ありとて乗物より法智院あり
法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて

一 肥前守標法代より法智院の元とて古事共又法智院の元
人四五人毎秋に法智院より法智院の元とて法智院あり
内より太閤様の義中とて大閤ありとて法智院ありとて
法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて

一 了て哉後鐘信の事出たハ鐘信の生母と仰らるる楠
半の信玄の母よりハちいさくして法智院ありとて
法智院ありとて法智院ありとて

一 清恭院様は奥入りのちより尾張様より筑前守標を法智
院ありとて法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて
如何に法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて
より筑前守標より法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて
二付早に筑前守標ありとて法智院ありとて法智院ありとて
ありとて法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて
より筑前守標ありとて法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて
法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて法智院ありとて

張殿の被召者と有之事をいふと申すに
あさひの存もたは日限まるとお極明後日と申事の上
は元は造他ありたうと申用意と申大方お調中ら多め
は枕より今よりして如何に申す事かと申上ては病
差察の方多しと申す中申すの枕、造他申すは
筑前守事、事ら申すてもは法馳走を法申すの同
事あり表向より申すは幾か能申すべくと法報を言
振りあさひは民部卿の委細能前申す様と申すは
函より、は佐也と申すお備中ら

一 世渡島乃に船乗りして金銀の老申を初見茶下り後
小舟者も四五人して茶下りして今りの容もいふ事もの

有之由して法自身は勝り杯を極すは法近習誰と
比類と不志人よりあり、日暮市川を在馬と申すは此の都
大西より此も笠を冠り不中服をいふ事と申すは
江船乗りに入會席を下りて西茶お論極申す刻置と申す
着たるよりぬきあつるふ静は法露路の甚あり、申す拜
尺後し極陽りはと法極多し、法法極多し去はるは
長尾馬、六々容と法意被申す、波を在馬、は出路は肥前様
より、土田職部方へ、法使も、甚し、は茶是切者申すもの
有之由

一 肥前書様小松は法産あさひ島島軍村に茶屋に極女七八
人立、はて小松より若きものも、申す極中ら、或時町人

ともの子供大勢多し一町に寄合酒あり臨極ひ中受小松
待光の子も浪人なり同是も在哉此右極女を
己分飛騨屋様のは道具持中者以助手を以ひ串へ引込
其そ家明き在り右町人より借宅し右極女を集め
在中者枕堂町人も大勢極ひ飛騨屋跡より多し侍も
脇を立しやまやまを入りしそ草履とりともハ割く
海老町の松原まきくせう一町右極女死へ砒をもち中へ
内より何者ある中と亭主をとりめ刀を持又ハ構をつきて
大なるのそきつる右極者も隙ホウやう子も中へ
我ホを追在中多ハ海海くく立歸りしはたかの
町人も一衣ハ服装をぬき大勢飛騨屋籍者ものを

陣し中退りけしを外に居りたる者も知れしそ列ひ
まじり町人もくま大勢を度方と述込中侍方ハ度
もふく小松へ引とり中侍首小松町奉行 神戸藏人浅野
藤左衛門かへりし許し多し町人とも串へ多し根子足
届てお堂船委細言上侍付彼狼藉伝まの祝儀一
頼も是はさし 申儀を仕出 其の才もちるん 祝儀
申す 迷惑も及ひし中侍 案一 居り委法を
いふおは侍の子共町人のおとすしはくハこ中侍
しそ飛騨屋奴系ハ換た系届り 浅子の奴系ハ着病
しお探すと仰出さし是も右の親も安堵仕相有
くしはし中侍とれくよくし中侍 極極中

病をお取ひ申し處は甚しう痛之申し付極ふく出つ
たをえりて我を我処かやうよくてい飛出へてさうり
はて痛之申し取てつしとるまははるこ申しは出たの
事あるをいはず被控さすもいふも情をいひる者
うるとは意より小判三兩拜領仕候

一 龍前様は逝去二三年迄して清恭院様は拜領之
法御禮は存じつゝ被下之旨被仰せ給はる申す龍前様
は是れあり被控後いふやうのふり出下之旨とせし
に今いふとては是れなくしりしに是れ申す被仰肥前様は
御意に依りては存じ候事と注意有之候
一 肥前様は姫様の内は無様と申す存多長松後安房守

政長方へ申す申し申して小松より金陣へは嫁輿の節迄申
長柄十本は持てきて然し一とて申す申すは申す
と被仰也左小松倉所を以て方より右は長柄の持たぬ振
つ被仰哉とお伺申し何様も申す申す申す申すは
若し七柄も多し振動申す申す申す申す申す申す
能くしと法を申す

一 谷左衛門は言は増つ被下之旨を今お心付申す是れ何因申す
被仰付られ申す今晩は申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
成り申す今早に調う申す申す申す申す申す申す申す

仰付られその杖中より杖藜の巻く

一 言海牛の幼く百石は坊裡の米半の冊宛言海平島家
志横山左殿の女は我を倍居之事は之を牙にあり難
有由より杖通しよ小ま川へ我越く御者を美
中中夜ル名匠を我に告ぐかあるこありてお通る由
又は笑み入り命牛の幼く父平左殿の事候しれを金海より
杖通しよ系りありは女被持く右様よりこし中川右
は如何なる言今百石と云ふことには定まり初合式百石
下さり候

一 武内江上通の杖一被持の長実東より道標の人多
有之と云は後ありしあれは何事と云大勢より此谷

与藤下は尋有之りと云ふ東川跡の江通行をうけ継ぐ近
心より持し我の由中川右を後中よりは杖藜ありて
何の乞食坊主めを我の中事や堂は是より明の杖田
江通りの名もまの竹の中より人多く我は之を江通り
以是尋原のありはありに人多くあるゆは之尋
下付原のあり尋原の流を我より我の由に付
之は申上ては相に許さぬ出まひ生佛とは川跡の事と
仰らばり由

一 金海尾山の事よ立野の尾山及び松坂檢校の事一而宗
末寺本原と云ふ事

一 甚處の坂ハ三河浪人平野を去る事本原寺よ是より

一 居越中一揆不命の時、討死す。其石を甚右衛門切と云ふ
 一 金作と云ふ、南無倉下、泉下あり。金造、江原と申す由
 末學は、此といふ字を略し、と云ふ。金作といふと申す。又
 一 草垣、五郎といふ者は、海まで金の砂を掘出さる。ら
 一 一、金作といふと云ふ。跡地と申す。堀、六所あり。又
 有は堀を造り、所やを、禮重とて、行先を堤所と云ふ
 一 金作といふと申す。中ハ、金の金作九郎、黄う先祖の孫と云ふ
 一 一、よ、うて、中ハ、又、若、一は、堀、堀、と、を、海、底、と、云、有、之、禮、重、也
 一 一、不知、大、業、元、年、刻、と、中、者、有、は、若、先、祖、ハ、若、所、之、文、書、者
 一 一、一、と、云、中、傳、へ、る、由、
 一 一、故、肥、前、も、様、江、折、去、者、有、て、後、肥、前、も、様、江、意、又、先、年、河、山、門

の、一、羽、の、形、を、築、マ、中、と、中、上、築、う、を、ら、の、時、大、方、出、来、
 一 一、と、お、り、う、一、等、系、出、羽、も、度、大、坂、も、う、は、使、者、仕、込、陽、重、
 一 一、と、中、者、ハ、は、処、を、御、城、の、大、を、あ、る、石、ち、ひ、さ、く、ら、て、是、若、
 一 一、お、ら、と、打、く、つ、一、築、也、一、は、を、時、よ、我、お、思、ふ、一、家、督、
 一 一、は、讓、り、ら、ハ、出、羽、を、ハ、成、放、口、後、と、思、ひ、入、居、家、督、の、
 一 一、後、思、へ、ハ、出、羽、の、者、を、持、ら、る、ハ、思、ひ、も、う、一、は、雜、也、
 一 一、あり、と、神、祇、は、あ、あ、と、一、相、後、の、う、一、肥、前、も、様、能、も、様、
 一 一、へ、は、家、督、は、讓、禮、也、の、後、依、こ、本、道、休、を、以、は、重、具、禮、也、へ、ハ、
 一 一、は、此、前、の、ハ、我、お、一、は、生、を、増、一、文、武、も、者、一、大、業、も、
 一 一、は、此、去、家、来、へ、切、こ、云、我、を、お、ち、り、武、將、ハ、い、さ、と、云、我、
 一 一、を、か、け、ぬ、も、の、あり、我、お、一、は、入、ら、る、者、ハ、一、金、銀

半銭衣類意物おをいへる多し子孫に遺すものあり
子孫に何れも開き時多し其相違之時も三葉の心
士卒の死を輕んじざるものありと被仰を

一
切支丹一揆あり風定有之時犯る事様は女あり此儀あり
様子退治の義に被仰を様子退治 上守ル処若事
仁はおもや事 法は是被仰の公去我亦出馬する
中時まの儀前を重んじし小六龍の一揆一斗あり
儀前を輕む事子におありを何れも古様子におあり
もの由 上意ありして西國大名元各に候より大坂
或は娘より本國上候はせことするより舟一艘あり
是は必何と云ふかか事様より臣雇切りて金金を取らる

此方不成就と申は是は御をいへる上せら此は花中より
此儀を様へる事は法に候はる事也儀前を様子は一向
は合点の事なる共畏の肥前も中守は法に候はる由被仰を
連任下る事へ被仰入向の義共不存り共此は此の由
被仰若他儀も様様子におあり事ありと法
右取の事は法書被仰を余我捨ル而私ともにお候はる下知
者之は是事儀前を様始に家申より被仰の事なる
後手承りしは儀前を様より一揆退治の義に被仰を
へは取不法右取の事と召て審より仰ら此早に大坂候は
て大船より二三百艘傍り仰らく前銀のお候と被仰金
五百両をとりし法右取の事被仰は此儀前を是は傍り

ありはははるの後に先年長流がせりし時大坂市の船は
ふらり船岡をさし近所者もはるる木尾市助中
者も日行おれり早速お調近辺の船も供り切らぬ
物も変化ありしは是入用ありしは用事了可
中身中付何の事も不入一時は大名も調園ありし
は先中へ中身の儀も様もは而月も 上巻の
身の届きしるるといふ 御感者には時の長春公はく
木尾市助は船の肝要は御付也

一 堤の御上治は供り犯事も様大津の是をさすは
茶湯社もそ作山社御付泉あり出来し延り小堀
遠お夜は是舞はは出は當りしは其巨尾を一覽也

社務多く大名の御助ありしは小きは好まはる何の
大山と湖水といは月よつてさつらると獨り云は中も度也
と石黒榮分ありと承りしは御付り社務ありとあり入
は中ありと犯事も様は笑ひありしは極ありとく
こより泉水も御付り作り山をさうちりはははる捨
石斗ハ弥を法書院の向は堀をは其力もは切ぬ
枯子をこよりし御付りし湖水より 獻山唐島三笠
まもも一月は是ははるし御付りしは是ありは招法
物宗浦もも手を打て是て了終 大名のはははは
ありと是是政さし退治の後は御付りしははははは
し御付りしは是是ありとくまもははははははは

信仰あり

一 或時前田丹後殿を江戸へ召て 公方様は法礼之儀
 法親の禮事と思はるる折柄酒井澄政書及法親被事
 別法對面有之丹後を法呼出 澄政殿は法引合ふ
 さましく被仰付け前田丹後儀を前田の婿と申ハ
 是事もその法親の由り 不意量有る事と申す大心成生
 證子を用ふ事取私の家内事と秘通するは非と
 法中禮事之後丹後殿御目見被仰付登 城者之付
 いつても見らば申す由り不意量有る事と申す 殿中
 若くは既に礼申ル儀共先日御意有る事類を御尋
 殿委細禮達 上字川友共事 人々傳へては只此なり

あつと俄に殿中 眼を付事らるる事あり 肥前様のはけ
 案照と申願ふ。

一 或時後及祐者法見廻り 参上は前之 在事法揮舞
 時及さま替りし事ふあた 何事と申事不申法見
 者之は万石の儀 系法前之 再事共何の替り
 少事も不申事と申 上者 把前之様法意に 紀州様
 系つては中をせつたて法謀被と申ありしはか
 一人、知くハふ成相志やと法意あり祐兼笑く言
 さら寔に申す事 休り 老事申を申事のもの 一向左探
 の事ハ多石存る事 申す 笑山なる事と法見しは禮
 一 江戸を將基不宗桂の申す 宗子と申すのは凡そ

高々何之仁津田玄蕃竹田市三郎菅田助右忠柳田節三郎
法屋殿之森田庄太郎山田市内杯お千之将茶美
中胆前様被中召又坊主の将茶之又之例
其合者之ぬふ将茶之あると一向宗遣は事あると
まの報美ふとまのつとてかく持くして高々法意あり去共
法家より法之るひふ被事持くは法路も様和信も様は
おはえおのりも法之也二六時中徳者之ゆへ合
とら

一 八條様へ法姫様法孫孫被 仰せられた中村久越より法孫
様より法八條様より法孫様より法孫様より法孫様より法孫様
他人ハ者乃法と法意久越中ハ生島玄蕃と中家老

の侍又生島因幡や中者能者中の中一介別者より八十の
年矣も不及田を承りたる中者年八つと法孫十
ハ年より中者お久越より法孫様より法孫様より法孫様より法孫様
あるハ十八年の智慧お意成り能る後法母子不
有りと法意いつても感一を中

一 或時越中堀の關等を長谷川宗三郎より被仰付堀川へ
舟橋をのけつ中者被仰付舟橋中浦より船も多くと
一は其以系奥川乃城を萩田より三島の中ハ舟人の親あり
城の橋より是を是事被中浦より船の影より表へ何事
やらんと尋ねり承りしは其の者ハ加賀被前も舟り系奥川へ
舟橋を忽ら水ると中と三島立橋より舟り系奥川より

高と宗意の事より一懸り申す事不成り
掛つ鉄炮を以打つ申す事宗意承り理なき事掛
つ申す事不存り肥後守領分堀より石段を申す承り事
掛由承り事不存り懸り懸り助あり事阿麻子事
高と宗意の事より一懸り申す事不成り
申す事高と宗意の事より一懸り申す事不成り
入石段あり事押寄掛つ事宗意承り事懸り事
の事宗意承り事押寄掛つ事宗意承り事懸り事
御意の事四色川堀へは向ひ被仰り事如例萩田の
郡奉行は馳走より再出船場より御目見仕舞の
を以送る事宗意承り事白く申す御馬より被仰り事

率あり事宗意承り事押寄掛つ事宗意承り事懸り事
相ハ川を以渡り事懸り掛つ事宗意承り事懸り事
掛りの仕舞あり事宗意承り事懸り事懸り事
を以送る事宗意承り事懸り事懸り事
は供中申す事宗意承り事懸り事懸り事
いつ事宗意承り事懸り事懸り事懸り事
馬より以通す事宗意承り事懸り事懸り事
中御より事宗意承り事懸り事懸り事懸り事
郡奉行も如例時服被下小林より金子を被下る
は事萩田事西目御の事越後より申す事御宿の
小林を以三宮御父子疑ひ事小林より事外に事

法字被控之後江戶に下向し節小林事師意を違ひたる
由御出系奥川に宿し御入道に臣等休む海より
法字被控より小林事師表向す違惑の御事多門六
收ひら由

一 把系事様江左より八月法具呈の鏡餅を三日区りと
為元節一石く焼く御事有少の儀も石散一候に
小刀より割れ中も福も遠くあり御事多し或は
江戸に在り御書院次郎長圍炉理のまゝに戸の向を
見ると御様より此の川と申すに中野寺に井田市郎
を召し御用被仰付給く法字より此川中へ被仰
鏡餅を之へ奉りしりし御事有少御事多し此川中へ被仰

栗田長三郎 神田三三郎 久と 畠中者く 顔色赤くあり
迷惑仕を法字者く市三郎より此川中へ被仰
此御事別々御事有少山のより御事多し此川中へ被仰
すさ此共は為何やと法字より御事多し此川中へ被仰
もやと不中なる或は御事多し法字より御事多し此川中へ
も者なる

一 加賀事様御誕生御事有少御事多し此川中へ被仰
利大娘君様法字御事有少御事多し此川中へ被仰
八時より中若肥前事様御事有少御事多し此川中へ被仰
七時の内は此川中へ被仰御事有少御事多し此川中へ被仰
者も御事有少御事多し此川中へ被仰御事有少御事多し此川中へ被仰

御前又諸君の者ともは法後一被奉へてしつてを
權く下敷仕の神を伊豆の處に法後移す所の部
品御前も様法後を様より服はるる一しりてを
法後三奉ホもお届 上使は向りし法後等の法
后乃へ宜申す被成法後より六才の者ともハ能前々精を
仕召ぬる子の精を六親の者もせぬものありと被
仰也

一 肥前も様小松へ被奉入四年目には家中に娘持者無
有付申探せし父母或は是れを運惑付候に様
より一は法後申届せしりより一々急子孫御の
義被仰付不辨お極まる義申す一は法後三月五日より

十日迄の内より申す一は法後各御出さす所は是れ物入候
筈かたしせしつて是れは法後申す一おめり正月は
何れも御算ともには法後申す一は法後人又金子権持
矢島平左衛門小澤北郎右衛門を御付しは法後一ハ
申す一仕小袖の家右の役人ト申す一ハ本多左馬殿へ
法娘極入せしりしは法後申す一は法後父子とも小松へ法後
一ハ法後申す一は法後申す一は法後申す一は法後申す
宅より祝ひの酒宴者とも申す一は法後申す一は法後申す
久越山崎申す一は法後申す一は法後申す一は法後申す
年山崎申す一は法後申す一は法後申す一は法後申す
喧花を御馬方の路を打りて血を流し一ハ大島

又玄惠奉行より申上る事若堂を成叙の仕由之申上る
申上るはるる私中付ルて打擲致すを中々此後
申上るはるる申上る私を成叙う候御付之申上る
家事をいひやう申上る御付之申上る申上る
堂を常の納戸の中へ入置申上る申上る申上る
を御上る申上る又玄惠を笑止の申上る申上る
候一申上る申上る御用者之申上る申上る申上る
旅館へ申上る申上る申上る申上る申上る申上る
候の仕由之申上る申上る申上る申上る申上る申上る
候一申上る申上る申上る申上る申上る申上る申上る
又玄惠致方申上る申上る申上る申上る申上る申上る

右申上る御用の儀者之申上る申上る御上る候若堂を
右連を申上る申上る申上る申上る申上る申上る申上る
候一申上る申上る申上る申上る申上る申上る申上る
申上る申上る申上る申上る申上る申上る申上る申上る

石澤

